

國學院大學學術情報リポジトリ

博物館における興行：歴史展の現在：
國學院大學博物館学講座開設60周年記念特集：
博物館・博物館学の諸問題 2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 哲司, Sugiyama, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000337

博物館における興行

— 歴史展の現在 —

杉山哲司

はじめに

現在の日本は、超高齢化社会や二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、さまざまな課題に直面している。博物館は、ユニバーサルデザイン・多言語化の対応などあらゆる人々が満足するような空間づくりが求められるようになった。多様化する社会への対応が急務となったが、現在の博物館情勢は厳しい状況にある。予算・人員の確保が難しく、事業の縮小をせざるをえないところも多い。そのため、人々に

とって親しみやすく身近な存在として、博物館の社会的意義を高めることが必要である。

しかし、博物館の利用頻度は、美術館や科学館に比べると、施設数の割に少ないように感じる。^①この問題には、どのような背景があるのだろうか。本稿では、近年における特別展の入館者数の動向を分析するとともに、博物館の歴史展について考察を進めたい。

一、博物館の機能と使命

博物館の機能については、博物館法に定義されている。その中で四つの機能に分類され、「資料の収集・保管」「調査研究」「資料の展示」「教育普及」である。博物館は、社会的な学術・社会教育施設としての役割が当初強かったと言える。

加藤有次氏は、現代における博物館機能として、「大衆が必要とする博物館ということの大前提として、大衆との相関性をもって博物館の機能が考えられなければならないのである。」⁽²⁾としている。その中で、展示をはじめとした教育普及活動が重要であると述べている。つまり、博物館の存在意義を示すには、博物館の顔である展示の重要性が高いことがわかる。

博物館における展示は、さまざまに分類されるが、ここでは①常設展②特別展(企画展を含む)の二つに分けたい。①の常設展は、公立博物館においては各フィールドの歴史・考古・民俗などの多岐にわたる分野を織り交ぜながら、各館の理念や目的に基づいて構成された展示である。とりわけ博物館の顔となる部分であり、常設展によって博物館すべての活動を評価されることがある。人文系・科学系博物館は、大型模型などの展示

を行うため、融通が利かない。そのため、来館者のなかでは一度行けば満足と言う意見が多いことから、目安としては十年程度でリニューアルが理想的とされている。例えば、江戸東京博物館の常設展では、江戸ゾーンと東京ゾーンに分かれ、実物大で復元した日本橋など大型の模型とともに実物の資料を展示している。実物の資料に関しては、各ゾーン月一回の展示替えを行っており、資料の保護だけでなく、来館者が何度来ても楽しめるように努めている。

②の特別展は、常に同じ形の常設展に比べると、流動的である。特別展は、細かく分ければ、I博物館単独による展覧会、II共催による展覧会、III巡回展がある。これらは、展覧会の運営が少々違うが、学芸員の研究成果の場であり、博物館を広報する意味でも博物館のメイン事業と言ってよいだろう。年に四〜五回行われ、内容はお正月やお花見、雛祭りといった季節感のあるものから、生誕や没後の記念に係る人物や出来事など、タイムリーなテーマが取り上げられる。普段は来館しない方でも、興味ある内容であれば、展覧会を見に来ることもあるため、特別展は、来館者の興味をひく魅力ある展覧会が求められる。また博物館の評価に直結しやすい。質の高い展示を行うことはもちろん、展示内容が世の中のニーズに合致しているの

か、ということとは重要である。さらに、博物館に対する評価だけでなく、その学芸員への評価にもつながることを忘れてはならない。評価に関して、さまざまな観点から必要ではあるが、その一つとして、展覧会の入館者数は目安になると考えられる。そこで、現在の特別展における来館者の動向を見ていきたい。

二、入館者数に見る歴史展の現状

博物館の展示のなかでも特別展は、とりわけ研究成果の延長線上にある。しかし、研究を意識するあまり多くの博物館は、特に入館者数を意識する館は少ないように思う。各館の設立理念やミッションを基に展覧会が構成されており、博物館の評価や入館者数とは必ずしも言えないが、数値で出るため明確に評価ができる。表1は、過去五年間の展覧会の入館者数ランキングを示したものである。

まず目に付くのは、外国関係の展覧会が多いことである。ルーヴル美術館や大英博物館などは、観光として訪れることも多い人気の博物館である。容易には行けないため、希少性の高い展覧会ほど人気と思われる。さらには、日本人は、強い外国志向を持っていることも挙げられよう。ランキングにもあるように、

ルノワールやモネといった有名な画家の作品が来日し、「初公開」の作品が展示されれば、来館者はおのずと増えることがわかる。展覧会を構成する上で、目玉の作品がなければ来館者は増えない。「初公開」や「著名な作品」を出すことは、入館者を増やすことに直結するのである。

会場を見ると、ほとんどが東京の博物館・美術館で、とりわけ美術館が多い。また、上野と六本木という文化施設が密集しているところが入っている。上野は、東京国立博物館を中心に文化施設が発展しており、日本の文化施設の中心と言える。近年では、東京都美術館で行われた伊藤若冲の作品を集めた「生誕三百年記念 若冲展」は、会期が一月ほどではあったが、数時間待ちという驚異的な行列を作り、ニュースにもなったことは記憶に新しい。一方で六本木は、近年になって文化施設ゾーンとして急速に成長してきたエリアで、特に洋物の展覧会が強い傾向にある。展覧会の入場者を取り込むためには、人が集まり、広報を大々的に打ち出せる地域であることが条件と言える。このような大規模な展覧会で、数十万人の来館者を呼び込むためには、開催館の力だけでは難しい。企画をはじめ、借用交渉や広報、図録の作成など、多くの作業が必要となるからである。表1にある入館者ランキングの上位のほとんどが、博物館・

表1 過去5年間の展覧会入場者数ランキング

	2016	2015	2014	2013	2012	
1	展覧会名	ルノワール展	マルモクタン・モネ美術館蔵モネ展	オルセー美術館展 印象派の誕生－描くことの目目	ツタンカーメン展 ～黄金の秘宝と少年王の真実～	ツタンカーメン展 ～黄金の秘宝と少年王の真実～
	会期	4/27～8/22 (計104日)	9/19～12/13 (計75日)	7/9～10/20 (計92日)	8/4～2013/1/20 (計150日)	3/17～7/16 (計122日)
	会場	国立新美術館	東京都美術館	国立新美術館	上野の森美術館	大阪天保山特設ギャラリー
	入場者数	678,639	763,512	710,038	1,152,995	933,130
1日平均	6,525	10,180	7,718	7,687	7,649	
2	展覧会名	始皇帝と大兵馬俑	ルーヴル美術館展 日常を描く 風俗画にみるヨーロッパ絵画の真髄	台北 国立故宮博物院－精品至宝	深澤－接戦の赤みと驚異の生きものたち	マウリツプハイス美術館展
	会期	2015/10/27～2/21 (計94日)	2/21～6/1 (計89日)	6/24～9/15 (計78日)	7/6～10/6 (計86日)	6/30～9/17 (計71日)
	会場	東京国立博物館	国立新美術館	東京国立博物館	国立科学博物館	東京都美術館
	入場者数	483,809	662,491	402,241	593,129	758,266
1日平均	5,147	7,444	5,157	6,897	10,680	
3	展覧会名	生涯300年記念 若冲展	ナムラボロ 踊る！アート展と、学ぶ！未来の遊園地	日本国宝展	ラファエロ	ボストン美術館 日本美術の至宝
	会期	4/22～5/24 (計31日)	2014/11/29～5/10 (計137日)	10/15～12/7 (計47日)	3/2～6/2 (計82日)	3/20～6/10 (計73日)
	会場	東京都美術館	日本科学未来館	東京国立博物館	国立西洋美術館	東京国立博物館
	入場者数	446,242	465,995	386,708	505,246	540,382
1日平均	14,395	3,401	8,228	6,162	7,402	
4	展覧会名	カラヴァッジョ展	ルーヴル美術館展 日常を描く 風俗画にみるヨーロッパ絵画の真髄	特別展「大恐慌展－ゴッホの真実」	会田誠展：天才でごめんなさい	ONE PIECE展
	会期	3/1～6/12 (計92日)	6/16～9/27 (計92日)	2013/10/26～2014/2/3 (計102日)	2012/11/17～2013/3/31 (計135日)	3/20～6/17 (計90日)
	会場	国立西洋美術館	京都市美術館	国立科学博物館	森美術館	森アーツセンターギャラリー
	入場者数	394,006	450,025	352,414	488,951	513,136
1日平均	4,326	4,892	3,455	3,622	5,702	
5	展覧会名	グリ展	シンブルなかたち展 美しいはどこからくるのか	京（みやこ）へのいざない	LOVE展：アートにみる愛のかたち	インカ帝国展
	会期	9/14～12/12 (計78日)	4/25～7/5 (計72日)	9/13～11/16 (計56日)	4/26～9/1 (計129日)	3/10～6/24 (計95日)
	会場	国立新美術館	森美術館	京都国立博物館	森美術館	国立科学博物館
	入場者数	388,557	360,902	331,058	429,514	456,484
1日平均	5,082	5,013	5,912	3,494	4,805	
6	展覧会名	ゴッホとゴーギャン展	マグリット展	モネ、風景をみる眼－19世紀フランス風景画の革新	ブーキン美術館展 フランス絵画300年	ベルリン国立美術館
	会期	10/8～12/18 (計62日)	3/25～6/29 (計86日)	2013/12/7～2014/3/9 (計77日)	7/6～9/16 (計65日)	6/13～9/17 (計85日)
	会場	東京都美術館	国立新美術館	国立西洋美術館	横浜美術館	国立西洋美術館
	入場者数	391,721	338,478	313,737	337,240	405,016
1日平均	6,318	3,936	4,075	5,188	4,765	
7	展覧会名	スタジオ設立30周年記念 ヒタヤ展	特別展「生命の大躍進」	光の賛歌 印象派展 パリ、セーヌ、ゾルマンディの水辺をたどる旅	ルーヴル美術館展 地中海四千年のものがたり	大エルミタージュ美術館展
	会期	3/5～5/29 (計76日)	7/7～10/4 (計86日)	3/11～5/11 (計55日)	7/20～9/23 (計57日)	4/25～7/16 (計73日)
	会場	東京都現代美術館	国立科学博物館	京都府京都文化博物館	東京都美術館	国立新美術館
	入場者数	329,427	335,697	310,219	291,531	394,732
1日平均	4,335	3,903	5,640	5,115	5,407	
8	展覧会名	村上隆の五百羅漢図展	"琳派誕生四〇〇年記念 特別展展覧会 琳派 京を彩る"	チュロリッヒ美術館展 印象派からシュルレアリスムまで	ターナー展	ゴヤ 光と影
	会期	10/31～2016/3/6 (計128日)	10/10～11/23 (計39日)	9/25～12/15 (計72日)	10/8～12/18 (計63日)	2011/10/22～2012/1/29 (計82日)
	会場	森美術館	京都国立博物館	国立新美術館	東京都美術館	国立西洋美術館
	入場者数	315,271	327,925	300,086	290,780	343,315
1日平均	2,463	8,408	4,184	4,616	4,187	
9	展覧会名	ボッティチェリ展	大美術館展 100のモノが語る世界の歴史	アンディ・ウォーホル展：永遠の15分	エル・グレコ展	セザンヌ－パリとプロヴァンス
	会期	1/16～4/3 (計69日)	4/18～6/28 (計62日)	2/1～5/6 (計95日)	1/19～4/7 (計68日)	3/28～6/11 (計67日)
	会場	東京都美術館	東京都美術館	森美術館	東京都美術館	国立新美術館
	入場者数	304,686	300,436	278,249	285,765	307,480
1日平均	4,416	4,846	2,929	4,202	4,589	
10	展覧会名	マルモクタン・モネ美術館蔵モネ展	特別展「大アマゾン展」	天皇后両陛下傘寿祈年 第66回 正倉院展	ミュージア財団秘蔵 ミュシヤ展 マリアの夢 モラヴィアの祈り	館長 庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見える昭和平成の技
	会期	3/1～5/8 (計61日)	3/14～6/14 (計83日)	10/24～11/12 (計20日)	3/9～5/19 (計71日)	7/6～10/8 (計86日)
	会場	京都市美術館	国立科学博物館	奈良国立博物館	森アーツセンターギャラリー	東京都現代美術館
	入場者数	302,312	270,518	269,348	283,474	291,575
1日平均	4,956	3,259	13,647	3,993	3,390	

「美術の窓」生活の友社の各年展覧会入場者数ランキングをもとに作成。
2015年以降は美術展のみの集計となっている。

美術館と共にマスコミ関係が主催に入っている。博物館で広報をする場合、ホームページやポスター・チラシが主流で、近年ではSNSが活発に利用されている。しかし、それらの方法は限界があり、広く周知することは難しい状況にある。そのため、マスコミ関係が入ることで、鉄道の駅などへの広告はもちろん、テレビ・ラジオ・新聞などのメディアへの露出が強化され、来館者の増加が見込まれる。マスコミ関係との共催は大規模な展覧会を行う上では、必要不可欠なのである。

一方、表1から見られる展覧会の大半は、美術展に限られ、歴史展と位置づけられる展覧会は、皆無と言ってよい。会場を見てみても、国立新美術館や国立西洋美術館など大きな美術館が大半を占め、歴史系博物館は入っていないことがわかる。上位一〇位にはランキングには入っていないが、二〇一五年に江戸東京博物館で行われた「徳川家康没後四〇〇年記念特別展」大関ヶ原展^②は歴史展のなかでも多くの来館者を集めた。

しかし、表1から明らかなように、入館者数で美術展と歴史展に差があるのはなぜだろうか。様々な要因はあるが、ここでは二つ取り上げたい。まず、日本における資料管理の規定である。見ごたえのある展示にするために歴史展では、古文書だけでは成り立たず、美術工芸などさまざまな作品を織り交ぜながら

構成をする。その中で目玉作品の多くは、国宝・重要文化財に指定されている場合が多い。国宝・重要文化財の指定品について、文化庁は平成八年(一九九六)に文化庁長官裁定で、「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項の制定について」を各都道府県・指定都市教育委員会教育長宛に通知された。そのなかで、展示期間について、原則として公開は「年間二回以内」、公開日数は「延べ六〇日以内」と定めている。この理由として、取扱要項の冒頭にも記載されている。「国宝・重要文化財(美術工芸品等。以下「重要文化財等」という。)の公開は、国民が文化財に親しむ機会を確保する観点から積極的に推進する必要がある。しかし、日本の文化財は材質がぜい弱なものが多いため、公開によって貴重な文化遺産が損なわれることがないよう保存について細心の注意を払わなければならない。」^⑦ 国宝・重要文化財に指定されている中で、材質が脆弱な絵画や工芸品、取扱いが難しい彫刻などの割合が多いことから、公開の制限がされていると言える。^⑧

表1を見ると、上位に入っている展覧会の会期は、八〇日〜一〇〇日と長期である。しかし、通常の歴史展の会期は五〇日前後とされる。多くの場合、国宝・重要文化財は通期での展示が困難で、半期が限界である。また、大規模な歴史展の場合、

収益の問題や単館では展覧会を構成することが難しいため、巡回展になることが基本である。例に挙げた「大岡ヶ原」展は、江戸東京博物館に加え、京都文化博物館と福岡市博物館にも巡回を行っている。巡回展は、各会場のバランスを考えて、作品リストが構成されるため、目玉となる国宝・重要文化財の作品は、全会場で展示が出来ないものである。入館者を伸ばすことができない背景の一因には、国宝・重要文化財の公開制限による会期・巡回の事情があると考えられる。目玉作品が常に展示されていないということは、来館者にとってみれば不満である。しかし、文化財を後世に遺すためには、やむを得ない事情であることは言うまでもない。

もう一つには、一般の方の博物館に対するイメージがあると考えられる。博物館の印象については、プラスのイメージもあるが、多くの人にとっては、「暗い」・「閉鎖的」・「敷居が高い」といったマイナスのイメージが多い。⁽⁹⁾ また博物館は、日常的に通う場、あるいは余暇に気軽に訪れる場としては選択されなないことが指摘されている。さらに館の特性として、美術館は作品と鑑賞者が向き合うことを主に設定され、資料そのものの「美しさ」のみを提示している。⁽¹⁰⁾ 一方で博物館は、説示型展示で、資料を通して歴史的情報を読み解くことが可能となるように提

示することが求められる。⁽¹²⁾ 特に歴史系博物館は、単純に作品を楽しむのではなく、歴史的背景を前提に展示をすることが多いため、一般の方にはわかりづらく、「敷居が高い」と思われてしまう傾向にある。そのような背景から、歴史展は入館者ランキングの上位に入ることができないのである。

三、興行としての歴史展

「入館者数」ということを念頭に置くと、近年における歴史展のタイムリーな展示は刀剣である。二〇一五年にリリースされたオンラインゲームをきっかけに、若い女性の人気を博し、展覧会にも大きな影響を及ぼした。実際の刀剣を博物館や神社などに見に来る女性たちを「刀剣女子」と言ったりしている。それ以前は、博物館で若い女性のグループを見かけることはほとんどなかったが、今では当たり前前の光景になりつつある。刀剣の展示、特にキャラクターとなった刀剣を展示すれば、若い女性を中心に多くの来館者が集まる。また、キャラクターとのコラボグッズや撮影コーナーを設けると、行列ができるほどである。一見すると、擬人化された刀剣と、実際の刀では全く別物のようにだが、博物館などで刀剣を見ることは、別次元のキャ

ラクターを身近に感じることができるのである。展覧会は、歴史を身近に感じさせてもらえると共に、その重さを実感することができるのである。

サブカルチャーをきっかけとして、若い女性が博物館を訪れることも増えてきたようで、博物館側もそのようなニーズに応えようとしている。しかし、刀剣に限って言えば、キャラクターとなった刀剣には若い女性が行列するが、キャラクターになっていないものを展示すると、来館者は大幅に減少してしまう。依然として、継続的に来館者を取り込むためには、十分な策が講じられていないのが現状である。そのため、恒常的に博物館に来館して気軽に楽しんでもらえるよう、学芸員は「興行」ということを意識しつつ、世の中の動向やニーズを見極めながら歴史展を作ることが必要である。ニーズに合った展覧会やイベントを開催すれば、マスコミも取り上げることが予想され、博物館の広報に直結すると考えられる。

四、歴史展の実状―大河ドラマ展―

「興行」ということを念頭に置いた歴史展として、近年継続的に行われている大河ドラマ展が挙げられる。そこで、大河ド

ラマ展から歴史展について具体的に述べたい。大河ドラマ展は、歴史展として老若男女から毎年注目を浴びている展覧会である。表2は、歴代の大河ドラマ展一覧である。

大河ドラマ展の最初は、平成二年（一九九〇）に放映された「翔ぶが如く」の展覧会である。初期はデパートの催事場で行い、撮影時のセットや衣装などといったものを展示していた。この展覧会をはじめとして、平成七年以降毎年開催されている。開催地は、大河ドラマの舞台となる地域と入館者が見込める東京などの都市部に位置する博物館が候補となる。毎年開催されているため、普段は博物館を訪れないが、ドラマファンということで展覧会を見に来る方も多く、人気の展覧会の一つと言える。

展覧会の内容を具体的に示すため、筆者が担当した二〇一七年NHK大河ドラマ「おんな城主直虎」特別展「戦国！井伊直虎から直政へ」を例に述べていきたい。本展覧会は、二〇一七年の大河ドラマが「おんな城主直虎」に決まってから、展覧会の準備が進められた。通常であれば、大規模な展覧会は二〜三年かけて構成するが、ドラマの内容が決まってから始動するため、実質一年ほどしかない。そのため、毎月NHK・NHKプロモーションと巡回館の学芸員が集まって企画会議を行い、リストアップなど急ピッチで行われた。出品交渉では、ブッキン

表2 大河ドラマ展一覧

実施年	展覧会名	会場	会期
平成29年(2017)	「戦国! 井伊直虎から直政へ」展	江戸東京博物館	7月4日～8月6日
		静岡県立美術館	8月14日～10月12日
		彦根城博物館	10月21日～11月28日
平成28年(2016)	「真田丸」展	江戸東京博物館	4月29日～6月19日
		上田市立美術館	7月2日～8月21日
		大阪歴史博物館	9月17日～11月6日
平成27年(2015)	「花燃ゆ」展	山口県立萩美術館・浦上記念館	4月18日～5月24日
		江戸東京博物館	6月4日～7月20日
平成26年(2014)	「軍師官兵衛」展	アーツ前橋	8月1日～9月6日
		兵庫県立歴史博物館	3月21日～5月6日
		江戸東京博物館	5月27日～7月13日
平成25年(2013)	「八重の桜」展	福岡市博物館	7月26日～9月21日
		江戸東京博物館	3月12日～5月6日
		福高県立博物館	5月17日～7月3日
平成24年(2012)	「平清盛」展	京都文化博物館	7月13日～9月1日
		江戸東京博物館	1月2日～2月5日
		神戸市立博物館	2月25日～4月8日
平成23年(2011)	「江～姫たちの戦国～」展	広島県立美術館	4月21日～6月3日
		京都文化博物館	6月16日～7月17日
		江戸東京博物館	1月2日～2月20日
平成22年(2010)	「龍馬伝」展	福井県立美術館	4月22日～5月29日
		長浜市長浜城歴史博物館	7月23日～8月31日
		江戸東京博物館	4月27日～6月6日
平成21年(2009)	「天地人～直江兼続とその時代」展	京都文化博物館	6月19日～7月19日
		高知県立歴史民俗資料館	7月31日～8月31日
		長崎歴史文化博物館	10月2日～11月3日
平成20年(2008)	「天璋院篤姫」展	サントリー美術館	5月30日～7月12日
		新潟県立歴史博物館	7月25日～9月6日
		江戸東京博物館	2月19日～4月6日
平成19年(2007)	「風林火山」展	大阪歴史博物館	4月19日～6月3日
		鹿児島県黎明館	9月6日～10月17日
		山梨県立博物館	4月6日～6月20日
平成18年(2006)	「山内一豊とその妻」展	新潟県立歴史博物館	8月12日～10月8日
		大阪歴史博物館	10月20日～12月3日
		江戸東京博物館	12月23日～2006年2月5日
平成17年(2005)	「義経」展	静岡県立美術館	4月15日～5月28日
		高知県立文学館	7月15日～8月31日
		千葉市美術館	4月5日～5月15日
平成16年(2004)	「新選組!」展	兵庫県立歴史博物館	5月28日～7月10日
		岩手県立博物館	7月23日～9月4日
平成15年(2003)	「武人画家と剣豪の世界」展	江戸東京博物館	4月3日～5月23日
		京都文化博物館	6月5日～7月19日
平成14年(2002)	「加賀百万石物語」展	江戸東京博物館	4月11日～5月25日
		岡山県立美術館	6月24日～7月27日
		江戸東京博物館	4月23日～6月2日
平成13年(2001)	「北条時宗」展	松坂屋美術館	7月27日～8月14日
		石川県立美術館	9月14日～10月27日
		江戸東京博物館	4月10日～5月27日
平成12年(2000)	「葵～徳川三代～」展	京都文化博物館	6月19日～7月22日
		広島県立歴史博物館	7月31日～9月9日
		福岡市博物館	11月3日～12月9日
平成11年(1999)	「元禄絵乱」展	江戸東京博物館	4月29日～6月11日
		静岡アートギャラリー	6月27日～7月23日
		徳川美術館	7月29日～9月17日
平成10年(1998)	「徳川慶喜」展	和歌山県立博物館	9月30日～11月5日
		徳川博物館	11月14日～12月17日
		江戸東京博物館	1月26日～3月22日
平成9年(1997)	「毛利元就」展 その時代と至宝	岡崎市美術館	4月3日～5月9日
		兵庫県立歴史博物館	9月23日～11月7日
		三蔵美術館(新宿)	1月31日～2月15日
平成8年(1996)	「黄金と花びら「秀吉」展	京都高島屋	4月2日～4月14日
		福岡三蔵	4月18日～5月5日
		茨城県立歴史館	5月16日～6月28日
平成7年(1995)	「将軍吉宗」とその時代展	静岡アートギャラリー	11月10日～11月29日
		東京都美術館	2月8日～3月30日
		広島県立美術館	4月8日～5月11日
平成6年(1994)	「黄金と花びら「秀吉」展	名古屋市博物館	6月28日～7月27日
		山口県立萩美術館・浦上記念館	8月8日～9月15日
		大阪市立博物館	4月23日～5月26日
平成5年(1993)	「英立つ中」中尊寺黄金秘宝展	サントリー美術館	6月4日～7月14日
		名古屋市博物館	9月14日～10月13日
		和歌山県立博物館	8月5日～9月10日
平成4年(1992)	「日本の黎明」翔ぶが如く展	和歌山県立博物館	9月22日～10月29日
		仙台市博物館	8月28日～10月3日
		福岡市博物館	10月14日～11月14日
平成3年(1991)	「日本の黎明」翔ぶが如く展	サントリー美術館	11月23日～12月26日
		岩手県立博物館	1月14日～2月13日
		天神岩田屋(福岡市)	5月2日～5月7日
平成2年(1990)	「日本の黎明」翔ぶが如く展	小倉市館屋(北九州市)	5月17日～5月22日
		宮崎山形屋(宮崎市)	5月30日～6月4日
		名鉄百貨店(名古屋)	6月8日～5月13日
平成1年(1989)	「日本の黎明」翔ぶが如く展	なんば高島屋(大阪市)	6月21日～5月26日
		天満屋(岡山市)	6月29日～7月4日
		NHKプラザ	7月11日～7月18日
平成1年(1989)	「日本の黎明」翔ぶが如く展	鶴屋百貨店(熊本市)	7月21日～7月30日
		鹿児島・黎明館	8月2日～8月12日
平成1年(1989)	「日本の黎明」翔ぶが如く展	高島屋(横浜市)	8月16日～8月28日

グなども多く、展覧会を作っていくうえで壁も多い。

本展覧会は、江戸東京博物館・静岡県立美術館・彦根城博物館の巡回展であった。大河ドラマ展ということで、ドラマの主人公である井伊直虎の生涯を中心とした展覧会が想定される。しかし、井伊直虎に関する資料は、「井伊直虎・関口氏経連署状」（蜂前神社所蔵・浜松市博物館保管）のみで、関連する資料とあわせてもわずかである。そのため、展覧会として成立させるには難しい状況であったことから、直虎を中心に幅を広げることが提案された。構成は次の通りである。

第一章「動乱を超えて〜東海の戦国大名と井伊氏〜」

第二章「遠江の雄〜井伊谷の領主として〜」

第三章「徳川家康と四天王」

第四章「遠江から近江へ〜直政、彦根藩創設への道程〜」

第一章は、戦国時代、井伊氏の周辺を囲んでいた今川家・武田家・織田家といった有力な戦国大名のゆかりの作品を紹介した。さらに、今川文化として、静岡ゆかりの絵師が書いた絵画作品もあわせて展示をした。第二章では、戦国時代の井伊氏を概観し、ドラマの内容とリンクした内容であった。続いて直虎

の次代である井伊直政にスポットをあてた。直政は、後世には「徳川四天王」と称されるほど、徳川家康の家臣として活躍した人物である。第三章では、直政が仕えた徳川家康や他の四天王ゆかりの作品を中心に展示をした。そして第四章では、直政の活躍を紹介し、「井伊の赤備え」や彦根藩創設へと至る歴史を展観する内容で結びとした。つまり、ドラマでは、直虎の一生を描くが、展覧会では井伊氏の周辺と直虎没後の時代まで含めたのである。

資料としては、大河ドラマ展ならではの目玉を展示した。例えば、井伊直親が奉納したとされる「青葉の笛」（寺野六所神社所蔵）は、今回の展覧会で初めて神社外初公開となったものだ。ドラマでも再三登場し、印象に残った方も多いと思う。その他にも、龍潭寺の僧侶たちや井伊谷徳政など、ドラマで登場した人物や出来事もなるべく展示をした。東京会場の目玉作品としては、本多忠勝の具足である。その周辺には、徳川四天王の肖像画をはじめ、刀剣や武器など、見ごたえのある資料を展示した。

展覧会構成を構築していく中で、企画委員の一人が会議の場で「展覧会のメッセージをどうするか」ということを提議した。美術展では、作品を見て「絵が上手い。画のタッチが好き」と

いう感覚的に感じ、満足感を得ることが主であるが、歴史展ではそうはいかない。展覧会を見た来館者が、歴史に対して何かしら考え、感じてもらう必要がある。本展覧会では、「一族存亡の危機に直面した井伊直虎が小さい力ながらも戦国の乱世に立ち向かい、その後子孫の力によって家が大きく発展した。直虎によって井伊氏の歴史が続いた。」というメッセージであった。これは、ポスター・チラシに使われた「守られねばならぬ未来があった」というフレーズに凝縮されていたと思う。歴史展は、資料を見て「感じる」ということはあまり多くはない。そのため、歴史展では学芸員が鑑賞者に対して、我々の生活や感情を豊かにしてくれるようなメッセージを明示し発信することが重要である。その方法は、パネルや演出などさまざまであり、博物館の規模や立地は関係ないのである。

展覧会を終え、多くの方からさまざまなご意見を頂戴した。ブラスの意見としては、見ごたえのある展示であったことである。本多忠勝の具足や刀剣、屏風といった、いわゆる立体物を多かつたことが挙げられる。古文書では、平面では来館者を満足させることはできないため、歴史展では立体物を展示することを意識することが重要である。マイナスの意見として、ドラマと内容が異なることであった。とりわけ井伊直虎に関連する

資料が少ないことや、彦根城に関することなどドラマとはほとんど関係のないところについては、良い評価を得ることはできなかった。この点については、大河ドラマ展の難しいところであると思う。ドラマの視聴者からすれば、大河ドラマ展と打ち出している以上、展覧会のストーリーはドラマとほぼリンクしたものだと思ってしまう。しかし、ドラマの内容に寄り添いすぎると、史実と齟齬が生じ、展覧会として成り立たなくなってしまうのである。あくまでもドラマと展覧会は別であり、展覧会は史実に忠実ということは前提としていることを来館者に理解してもらう必要があるだろう。マスメディアと連動した展覧会では、そのバランスを上手く保つことが今後の課題であると感じた。

また、予想外なこともあった。その一つには、井伊氏の家老である小野但馬守についての問い合わせが多かつたことである。今回の展覧会では、小野但馬守については、古文書の文章中に登場するだけであった。展覧会が始まるまでは、予想していなかったが、ドラマの影響が強かつたということは言うまでもない。ドラマで演じている役者の人気によって、歴史上の人物の人氣も左右されることがわかる。つまり、マスメディアの影響は非常に大きく、その後の歴史上の人物への印象にも直

結すると考えられる。その意味では、正しい史実を伝える大河ドラマの展覧会を行うことは、より責任が重いのである。

おわりに

本稿では、入館者数の動向と歴史展の現状について分析をした。先述したように、入館者数がすべてではないが、どんなに研究としての意義があっても、魅力ある展覧会でなければ来館者は来ない。また学芸員の仕事は、文化財の保護や研究だけでなく、展示によって世の中に正しい歴史を伝えていくことである。そのためには、博物館を利用してもらわなければ意味はない。今後、入館者を増やすためにはどのようにしたら良いか、各館が社会や地域のニーズと向き合って展覧会の企画やイベントを模索することが求められる。博物館の規模や立地によって、様々な制約はあるが、その努力は怠ってはならない。

註

(1) 平成二十七年年度の日本博物館協会の統計によれば、全国の博物館数は四一九七である。そのうち、総合・美術・自然史など一〇の区分に分

けられ、歴史系に含まれる博物館の総数(総合・歴史・郷土)は、全国で二六三六館、全体の約六二%にあたる。また、年間の入館者数(アンケート回答数一三五六)では、約五九四万人、全体の約三五%という結果が示された。(日本博物館協会「博物館研究」第五二巻第四号二〇一七)

(2) 加藤有次他編『新版博物館学講座3 現代博物館論・現状と課題』雄山閣出版 二〇〇〇

(3) 加藤有次他編『新版博物館学講座4 博物館機能論』雄山閣出版 二〇〇〇、山田磯夫「展示形態と分類」青木豊編『人文系 博物館展 示論』雄山閣 二〇一三などを参照

(4) 美術展示とは、美的価値を有する作品を展示し、観衆に鑑賞の機会を供する展示方法のこと。(中略)美術展示は多種多様な資料により、美的価値を鑑賞者が実際に「もの」を見て楽しめるように行われる提示とともに、展示企画者の考えや主張を表現・説示し、広く一般に対し、感動と理解、発見と探究の空間を提供することが求められる。(全日本博物館学会編『博物館学事典』雄山閣 二〇一一)

(5) 歴史展示とは、人文学的分野において、地域展示、地理的展示が空間軸を展示原理とするのに対して、ものごとの消長を原理とする展示であり、時間軸を基本とするが、その事象の空間的広がりも視野に入れた展示原理である。歴史博物館はもとより、多くの総合博物館や大規模美術館で展示の主要原理として採用されている。しかし、歴史そのものは修辭的なものであり、モノだけで歴史そのものを語るのとは時代、分野、領域によってはきわめて難しいと言わざるを得ない。具体的なモノの乏しい領域や、書かれた文書に多くを負っているような分野の歴史を展示によって描こうとすれば、いきおい多くの二次資料に頼らなければならなくなり、展示としてはインパクトの強いものとなりにくい。一方、多くのモノがある時代や分野、領域の展示においても、

- 提示したモノからどのような情報を引き出し、それをどうつなげて歴史を読み取っていくのか、再構成してもらおうのかをうまく誘導できないければ、単なるモノの羅列にならざるを得ない。(前註(4))
- (6) その他に、大規模な歴史展を誘致できる博物館が少ないこと、予算や学芸員の技量の研鑽の問題が挙げられる。(齋藤慎一「歴史展覧会の難しさ」『学習院大学学芸員課程』NO. 20 学習院大学学芸員課程委員会 二〇一六)
- (7) 「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項」第二条一項 平成八年(一九九六)七月十二日
- (8) 本稿脱稿後、文化庁の文化審議会に設けられた専門部会が石、土や金属など頑丈な材質でできているものは、公開期間を延長できるよう、検討を進めるという報道がされた。石造りの仏像や刀剣などの展示期間が延長される可能性が出てきた。今後の動向が期待される。
- (9) 杉山正司「博物館と学芸員に関する認識と意識・國學院大學学芸員過程受講生にみる。」『國學院雜誌』第一二五卷八号 二〇一四
- (10) 山口加奈子「博物館における『楽しみ』の関係性」前註(9)
- (11) 前川公秀「美術館の課題・美術資料の芸術性と歴史性」前註(9)
- (12) 前註(11)
- (13) 市川寛明「大河ドラマと博物館展示」大石学・時代考証学会編『大河ドラマをつくるということ』時代考証学の提唱。』名著出版 二〇一一